

また、改暦弁など五つの巻末資料もなかなか得難い文献であろう。

天文ブームの波にのって実にさまざまな天文書が町にあふれている現在、移り変りのはげしい天文界の話題の中には、とかく豹変するものが多いが、暦と時は年ごとに積み重ねられて動かぬ歴史となり、いつの世にも変ることがない筈である。

この事典をまとめるために、数少ない昔の暦や時に関する原典を調べられた内田氏のご苦労は、どんなに大変なことであったかと頭が下る思いである。

この事典によって私達も新しく暦や時について広い知識が得られるものと喜んでいる。

机上に置いて断片的に読物として頁をめくるのもまた楽しいことと思われる。(小山ヒサ子)

新刊紹介

流星塵とその測定法 (顕微鏡でみる天文学)

森久保 茂著

(銀河書房, 昭和61年8月13日発行, A5判, 100頁, 1500円)

流星塵とは、流星現象として気化した物質が再び凝固し、球状になったものといわれている。我々を取り巻く環境の中には、こういった天然のものに加えて、工場などから放出される塵埃が、多数浮遊し、やがて沈澱していく。地上の雪や雨、そして海底の堆積物の中に特異な球状物質が含まれていることに初めて気附いたのは、1874~1876年のチャレンジャー号による深海底堆積物の分析による。

流量塵とも宇宙塵とも呼ばれているこの物質は、その大きさが μm サイズであることから、採集そして分析へと困難が常につきまとう。

著者・森久保氏は医業を本業とする、古くからの天文アマチュアの一人である。医業のかたわら、職業上の武器＝顕微鏡を駆使して、宇宙をその視野の中に捕えようとしている。いわば著者の流量塵に傾けた情熱の集成ともいえよう。したがって、第1部：研究の経過は、内外の主な研究及び研究者の紹介に始まり、各人の研究成果が披露されている。そして、第2部：測定法では、流星塵の採集、そして顕微鏡による検査法が、著者の経験を元に具体的に示されている。特筆すべきは、第3部の流星塵の電子顕微鏡による観察とX線分光器による分析であろう。17個の流星塵についての電子顕微鏡写真と共に掲載されている主成分とその量のスペクトルがある。

著者は巻末に、流星塵の研究は地味なため研究者も少

なく、従って専門の単行本も発行されていなかったことを嘆き、流星塵を再認識してほしいとの願いから、この小冊子をまとめた、と結んでいる。流星群との関連を含めて、まだまだ多くの謎を持つ流星塵を改めて考えさせられる、という意味から誌上を借りて紹介しておく。

(香西洋樹)

お知らせ

昭和62年度朝日学術奨励金候補者募集

上記について朝日新聞社より本会あてに推薦依頼が来ています。

応募希望者は、下記要領を参照して応募票を学会庶務理事まで請求し、必要事項を記載の上、2月20日(必着)までにお送り下さい。

応募要領

1. 本奨励金の贈呈対象は、個人、グループ、団体を問いません。独創的な研究で研究費に恵まれない研究者の応募を期待します。いくつかの学問領域にまたがる、いわゆる「学際研究」も歓迎します。
2. 対象となる研究は、継続中のものでも、これから始めるものでも結構です。また同じ研究に対して継続して贈呈する場合があります。
3. 応募は原則として学界の関係者からの推薦を望みます。
4. 奨励金の希望金額には、特に制限はありません(なお、昨年度の贈呈金額は8研究に対して合計2,000万円でした)。
5. 朝日新聞社内に設けられた選定委員会が、候補研究につき学界各方面の意見をきき、選定します。

東京天文台助手公募

東京天文台では、次の通り助手を公募します。

◎(a) 分野, (b) 仕事の内容, (c) 所属, 勤務地, 及び (d) 問い合わせ先, (e) 応募提出期限

- (1) (a) 太陽物理学 (1名)
 - (b) 地上及びスペースによる太陽の観測的研究
 - (c) 太陽物理部又は分光部
 - (d) 日江井栄二郎
 - (e) 1987年2月21日(土)(必着)
- (2) (a) 太陽系天文学 (1名)
 - (b) 太陽系小天体の観測的研究
 - (c) 測光部
 - (d) 田鍋浩義
 - (e) 1987年2月21日(土)(必着)
- (3) (a) 銀河天文学 (1名)
 - (b) 銀河天文学の研究, 観測およびシステム開発